

太宰 治『人間失格』とカフカ『変身』

92E067 佐藤 雅子

「恥の多い生涯を送ってきました。」

『人間失格』の主人公、大庭葉蔵の手記の書き出しである。思わず、やはり読むのはよそうかと読者に思わせてしまうような、ずーんと重い書き出しであるが、この調子で手記は進んで行く。葉蔵は、物心ついた時から人間の営みというものが全く理解出来ない。彼は、自分を含めたすべての「人間」を理解出来ず、信頼出来ず、狂気じみた異常な「人間恐怖」を心に秘め、怯えながら生きている。酒に溺れ、女に溺れ、麻薬に溺れ、周りの人間をも皆自分の不幸に巻き込んでどんどんと堕ちて行き、ついには彼は「人間失格者」——廃人となる。

『人間失格』の文面は、主人公葉蔵の——そして著者である太宰自身の、悶え苦しむ魂の叫びである。“心の葛藤”などという言葉では全然足りない、読者の心に直接ぶつかってくるような、むきだしの人間の本性の絶叫なのである。

一方、カフカ『変身』は、こんな感じで始まる。

「ある朝、グレゴール・ザムザが目をさますと、自分が一匹の巨大な毒虫に変っているのを発見した。」

思わず「ぎゃっ」と悲鳴を上げたくなるような書き出しだが、主人公グレゴール・ザムザは「ぎゃっ」などと叫ばない。さぞかし驚嘆し、混乱し、怯え苦しむだろうと思いきや、グレゴールは読者の方が啞然とするほど冷静なのだ。驚きと恐怖に打ちのめされ、取り乱す家族の中、グレゴールは一人落ちつきはらい、心配しないで下さい、今すぐ仕事に出掛けますから、などとなんだか間の抜けた事を言う。しかしグレゴールは家族に人目につかぬようひっそりと隠されたまま、どんどん“虫化”していくのである。腐りかけた残飯を食べ。壁や天井を這い回り、グレゴールは「人間」の心を持ったまま「虫」になっていく。グレゴールは、一体何故突然虫に変身してしまったのか、その原因は何なのかということは、一切ここに書かれていない。主人公の本心もはっきりと明かされない。感情の魂のような『人間失格』の文章に対し、『変身』はあくまでも冷静な、報告文的な文章で淡々と進んで行く。しかしここではっきりしている共通点は、主人公が、「普通の人間」の社会から外れた、「普通の人間」以外のものになっていく姿が描かれているという点である。

更にこれらの小説の共通点、相違点を探ってみるとまず挙げられるのが、この二人の主人公の両方共が、人間に激しい恐怖感を抱きながらも、又は人間から外れたものへと変化していきながらも、「人間」を思い切れず、憧れ求めているということだ。葉蔵は、幼少の頃から人間に対して気も狂わんばかりの恐怖を抱いていながらも、自分を「人間」につなぎとめておきたい気持ちもあり、自分の本性を完全に隠して“道化”を演じることを思いつく。その汗だくの、死にもの狂いの演技は、人間に対する彼なりの「求愛」であった。しかしそうした葉蔵の、ほとんど人間への“恐怖心”からなる「求愛」行為とは違い、グレゴールの家族への想いは“愛情”である。彼はおぞましい虫になってしまった自分の事よりも、働き手を失ってしまった家

族の事をしきりに気にし、齒がゆさに苦しむのだった。健気なほど家族に気をつかい、ただ一人グレゴールの部屋に入って来て世話をしてくれる妹を怖がらせないように、布を被って自分の恐い姿を見せないようにする。夜にはドアに耳をくっつけて、言葉少なに語り合う家族の声を聞く。このように、グレゴールの「求愛行為」は健気で、控え目で、そこには家族への“愛情”があった。そして、こうした「求愛行為」に興味を失っていくことで、「人間」というものに関心を失っていくことで、二人の主人公は、急速に「人間以外のもの」に近づいていくのである。

そして二人の主人公は、もうどうしようもなく“廃人化”してしまっても、もう「普通の人間」には戻れないであろうことを充分知っていても、「人間」としての“大きな幸福”に恋い焦がれているのだ。そしてその“幸福”の象徴が、グレゴールにとっては妹の奏でるバイオリンの音色であり、葉蔵にとっては人を疑うことを全く知らない乙女ヨシ子の汚れのなさなのである。そして悲しいことに、その“幸福の象徴”の破壊によって、二人の主人公は「死」の烙印を押されるのだ。

『変身』も『人間失格』も主人公の「死」によって終わる。ある騒動の後、グレゴールの最愛の妹グレーテは、彼に向かって言う。

「私たちもうこれを放り捨てるべきよ。」いつかグレーテを音楽学校に入学させてやるということが、グレゴールの「人間」としての最後の夢であった。彼は独り自室に戻り、そして静かな「死」を迎える。グレゴールが葉蔵と大きく異っているのは、最後の最後まで家族への“愛情”を持ち続けた事である。家族への愛情をもって、彼は「死」を「選択」したとも言えるであろう。

しかし葉蔵。彼の生死ははっきりせず、死んでしまったとはここに記されてはいないが、しかし彼は「人間」としてもはや完全に死んだのだ。“信頼の天才”というヨシ子の美德、葉蔵にとっての“幸福の象徴”が無残にも汚され、彼は決して癒えることのない決定的な傷を負い、完全に墜落し、ついには人間的感情の一切を失う。彼にとって「ただいっさいはすぎていく」のである。もはや生きている死人だ。結局、葉蔵は人間に対して、愛情も、憎しみも抱くことは出来なかった。これは、家族への愛情を持ち続けたグレゴールと葉蔵の、大きな相違点である。

『変身』も『人間失格』も、「死」の中に何かからの「解放」を暗示しているように思える。グレゴールは確かに家族への“愛情”から死を選択したとも言えるだろうが、その聖人的とも言えるような静かな「死」は、グレゴールにとって何かからの幸せな「解放」を意味したのかもしれない。葉蔵は「人間」として死ぬことによって、人間に対して何の感情も抱かなくなる。皮肉なことに、彼は、人間的感情の破壊によって、幼少からずっと苦しめられてきた“人間恐怖”からついに「解放」されたのである。

そして最後に挙げたいこの二つの小説の共通点は、主人公の「孤独」である。

グレゴールの仕事である外交販売員とは孤独な仕事である。いつもあちこちを独りで旅して回るため、彼に特定の友人ができる事はなかった。そして「虫」に変身してしまった彼を理解してくれる人間も一人もいない。父親はグレゴールを見下ろし、こうつぶやく。

「こいつがわたしたちのことを分かってくれさえしたら。」

家族は、「虫」の姿をしたグレゴールが「人間」の心を持っていることなど夢にも思わないのだ。グレゴールが家族の言葉を理解し、家族の経済的危機を心苦しく思っていることなど理

解しない。先にも述べたグレゴールのささやかな「求愛行為」を理解しない。グレゴールが依然として抱き続けていた愛情を、家族は理解しようとしなかったのである。

葉蔵と親しかったバアのマダムは言う。

「葉ちゃんは神様みたいないい子でした。」葉蔵が聞いたらきっと笑っただろう。その「神様」というものこそ、「大庭葉蔵」の対義語であるとも言ったかもしれない。彼は例の“道化”の名演技で、多くの人間を笑わせ、自分を「楽しい奴」と思わせることにほとんどの場合成功し、好かれたが、その裏の陰惨な素顔を理解するただ一人の人間こそが、彼に必要なったのではないか。

「孤独」——それこそ二人の主人公にとっての最大の不幸であり、彼らを「人間以外のもの」に変えてしまった最大の原因のように思えるのである。